秋田県立博物館研究報告　第8号　57−80ページ　1983年3月

秋田県の鹿嶋行事

― 雄物川町深井の事例を中心として ―

益子清孝・伊藤正祥

はじめに

当館では，昭和58年1月4日から，地域展「平鹿ー水とくらしー」を開展した。それは，農耕社会を背景とした近世から近代にかけての平鹿の歴史的風土を，「水」を主テーマとして，とらえようとしたものである。一方，本館がめざす綜合化のための地域研究の成果を展示したものである。

本展示では，平鹿の民俗行事も展示している。その一例として，雄物川町の鹿嶋行事もとりあげた。地域の民俗行事は，地域の歴史的風土によってはぐくまれたものであり，平鹿研究における重要な調査・研究の対象である。

そこで，本稿は，秋田県の鹿嶋行事のあらましを紹介し，主として雄物川町深井の鹿嶋送りの調査結果を報告します。

Ⅰ　県内の鹿嶋行事

人形行事については，菅江真澄の『雪の出羽路』など[1]，多くの論議がなされてきたところである[2]。神野氏は全国的なレヴェルで人形送り行事[3]を整理し，その意義を説いている。さらに『東日本の人形道祖神』の中で，「カシマサマは，青森・岩手・秋田・千葉にある。一般に鹿嶋人形の名で知られているのは，鹿嶋送りの行事に登場し，舟に乗せられて，川や海に流される小さな人形である。人形道祖神のカシマサマも，地域的には鹿嶋祭の分布するところと重複しているが，この二つは一応別系統の人形行事ととらえておきたいと思う」と述べている。また，「人形道祖神を立てるムラで，また別の人形をつくる行事を重複して行なっている場合がある。」「秋田県内では人形道祖神が立てられている地域と『カシマオクリ』と称する人形祭を行なう地域が重なっている。いずれか一方だけを行なう所もあるが，この両方の人形を作るムラもある」ことを指摘している。

さらに，最近は，県教育委員会の手で『秋田県民俗分布図』[4]が編まれ，一層鹿嶋行事の分布状況が明らかになってきた。ここでは主に『秋田県民俗分布図』のもととなった調査カードを中心に事例をあげるとともに，県内の各市町村郷土誌(史)やその他の文献に著わされている事例及び筆者らの調査記録をも記した。なお〔　〕内の数字は別図の調査地区番号に対応し，氏名は調査者である。

事例1〔10. 大館市根下戸字下袋　　日景　健〕

「カシマサマ」　6月1日

この日は大館の人が，カシマ様を舟場の川へ持って来て流す日で，そのカシマ様に正月から干しておいた干し餅を供えてからでないとホシモチは食べられなかった。カシマ様は火伏せの神様でもあって，門口に水を用意して，カシマ様がまわる時に大館ではそれを屋根にまいた。この部落でもそうする人がいた。

事例2〔30. 八森町岩館字向台　　橋本泰輔〕

「鹿嶋まつり」　6月末

八幡大菩薩，大漁・海上安全・五穀豊作

戦国舟に武者人形をのせ，祈祷して村中を回る。港の中を流し，そのあと沖へもっていって流す。

事例3〔31. 八森町岩館字第一　　木崎和広〕

「鹿嶋流し」　6月　日

6月田植が終ると，部落一同で大きな大和船をつくり，有志で武者人形をつくり祈祷旗をつける。これを舟にのせ仕度ができたら部落の鹿嶋宿（旧家で決っている，須藤三四郎家）で参拝する。その後，部落をねり歩き（笛・太鼓ではやす），港の中を若者3人で泳ぎながら鹿嶋舟を3回まわす。それから舟で沖合1000mくらいに出て流す。その後，直会をする。

事例 4〔65. 秋田市四ツ小屋　　長谷川秀樹〕
「鹿嶋流し」　旧暦６月
ワラで作った舟にワラ人形を乗せ川に流した。若者組（15～30名）が鹿嶋流しの行事を行った。宿は輪番制であった。

事例 5〔69. 雄和町椿川字鹿野戸　　長谷川秀樹〕
「鹿嶋流し」　新暦６月13日
ワラで舟を作り，ワラ人形を乗せ雄物川に流した。

事例 6〔70. 雄和町向野　　長谷川秀樹〕
「鹿嶋流し」　旧暦６月
田植が終るとワラで舟と人形を作り，ワラの舟に乗せ川に流した。

事例 7〔100. 西仙北町心像字次第森　　進藤孝一〕
「鹿嶋流し」　旧暦６月
ワラ人形を作り舟に乗せ，鹿嶋大明神の旗と餅米をそえて川に流した。

事例 8〔103. 神岡町神宮寺　　長山幹丸〕
「鹿嶋流し」　旧暦５月
ミズナラの板を切って来て舟を作り，鹿嶋だてのふれをする。村の家々では，ワラ人形を作り（刀をさし旗を背にたてたもの），顔にはヤマフジの半紙（コウジ紙とコウゾで作った紙）で作り，オハチや銭を入れて背負わせる。この人形をもっていって舟にのせ玉川に流す。流したあとは一杯やった。鹿嶋流しは地震がおきないようにやったものなり。

事例 9〔105. 南外村外小友　　長山幹丸〕
「厄神流し」　７月１日
———

事例10〔106. 大曲市花館下大戸　　藤田秀司〕
「鹿嶋流し」　６月
この日は決っていないが頭座からカシマ流しのふれがでる。この日，ワラカシマを作ってまつり，午後から中央の不動さん前で鹿嶋舟にのせ玉川に流す。地震よけ・害虫除けともいっている。その後，会費を出しあって懇親会をやる。

事例11〔107. 大曲市四ツ屋　　長山幹丸〕
「鹿嶋流し」　５月
部落の田植終了後に行なう。輪番制で鹿嶋だてをするふれ出し，宿の家では舟を作る。舟はクリの木で枝でふちをまわして作り，ワラを各戸で出しあって，舟やせんどうを作る。家々ではワラ人形を作り，鹿嶋大明神の旗をさし，刀をささせ，やりをもたせ，赤飯や一文銭を肩からつるして神棚にあげ，お神酒をあげて拝む。その後，宿の家にもっていって舟にのせる。

事例12〔109. 大曲市大川西根新掘　　藤田秀司〕
「鹿嶋流し」　５月27日
21日にワラ鹿嶋を作り，27日に流す。主人がつくり入口の柱にゆわえつけてまつる。27日にコワエをつくって供え，部落ごとに柴舟にのせ鎮守の境内で神宮に祓いをうけて川に流す。８組ほど鎮守に集まる。

事例13〔112. 仙北町板見内本郷　　藤田秀司〕
「鹿嶋流し」　５月15日
コワエをつくり鹿嶋にたてる。翌日は流す日で２日間休む。流す日は重箱をもって頭屋で懇親会を催す。

事例14〔113. 仙北町上田茂木　　藤田秀司〕
「鹿嶋流し」　６月１日
ワラ人形を作ってまつり，柴舟にのせて川口川に流す。地震よけ・災害よけともいっている。

事例15〔121. 大森町八沢木字前田本木北野　若松義十〕
「鹿嶋送り」　６月15日
———

事例16〔122. 大森町字菅生田　　若松義十〕
「鹿嶋祭」　６月20日
———

事例17〔123. 大雄村字阿気　　若松義十〕
「鹿嶋流し」
———

事例18〔125. 雄物川町字大沢　　若松義十〕
「鹿嶋流し」
———

事例19〔126. 雄物川町沼館字沼館　　中野　正〕
「鹿嶋送り」　６月16日
鹿嶋をつくる。餅をつく。鹿嶋に餅を背負わせ，舟賃を供え，町内毎に行なう。

事例20〔127. 平鹿町下吉田　　若松義十〕
「鹿嶋流し」
———

事例21〔134. 増田町八木字中八木　　薄葉篤蔵〕
「鹿嶋さん」　６月上旬
かっては村のはずれにワラ人形鹿嶋さんをつくり，悪疫・悪霊の退散を祈っていた。現在はなされていない。部落の入口に鹿嶋大神の石塔がある。

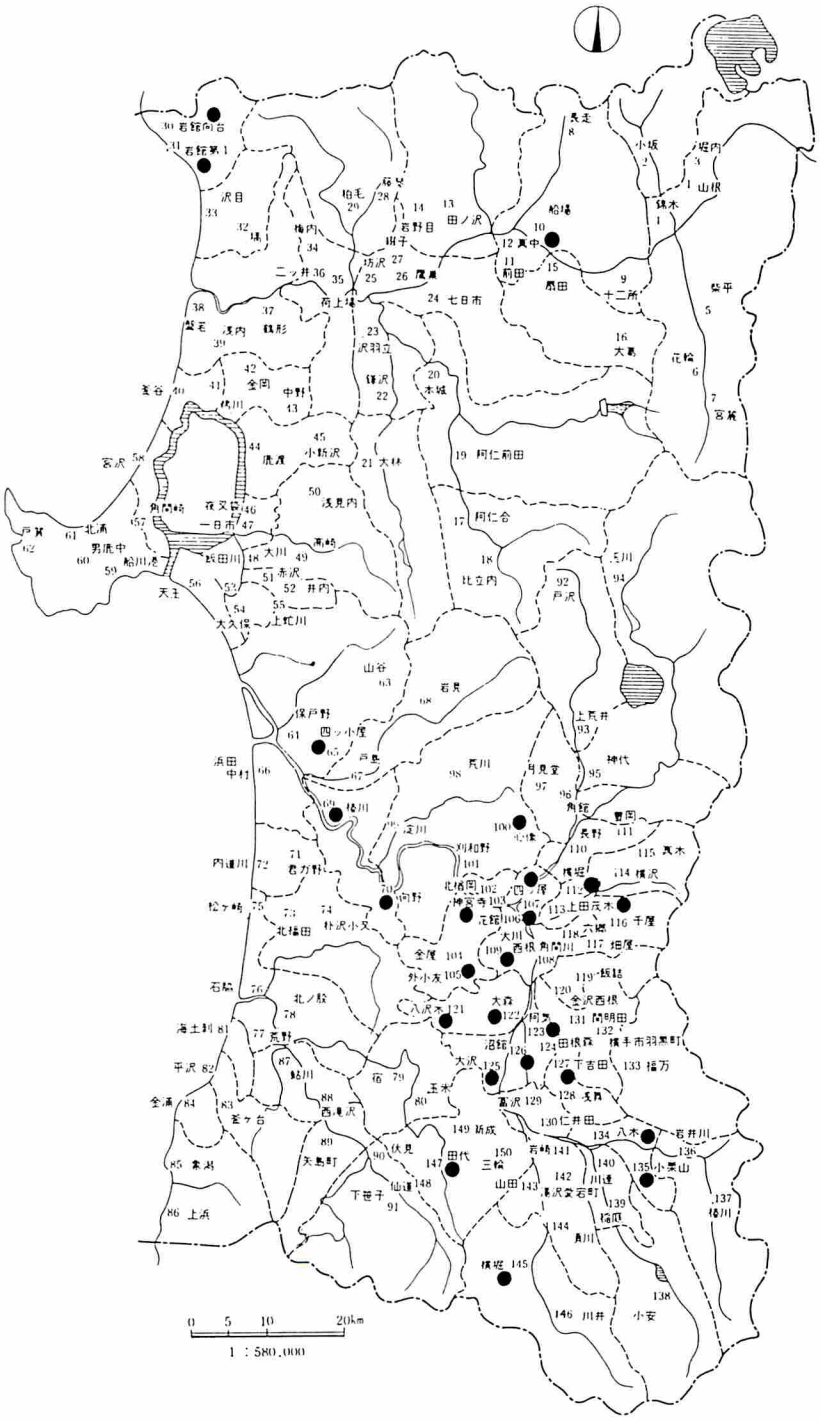


図2　鹿嶋行事の分布
（「秋田県民俗分布図」調査カードより。）

事例22〔135.増田町狙半内字小栗山　　薄葉篤蔵〕

「鹿嶋さん」　6月初旬

かつては部落の入口に鹿嶋さんをつくり，悪疫・悪霊退散を祈った。明治30年頃まで続いた。部落の入口に鹿嶋大神の石塔がある。

事例23〔145.雄勝町横堀字旭町　　鈴木俊男〕

「鹿嶋まつり」　5月25日

白い紙に「鹿嶋大明神」と書いて，玄関の所に貼り出しておく。若い者が馬車に舟を作って回ってきたとき，灯明とおはちを供えて，鹿嶋様（紙）を集めてもらう。若い者は，それを役内川の万石橋で川に流す。

事例24〔147.羽後町田代上到米字唐松　　鈴木俊男〕

「鹿嶋様」　旧4月9日

部落に流行の病気が入らないために鹿嶋様を祭る。供物は決っていない。

事例25　大館市[5)]

「鹿嶋祭」　6月1日

「鹿嶋祭とて古来より大館にあり，六月一日に旗を立て町々を廻り，米白川へ流すと云ふ」（「大館旧記」）。

「鹿嶋祭りとて，六月朔日に町々にて，武者を藁ニて拵へ　旗を立　町々を廻り　米白川へ流すなり」（「郷村史略（安政年間）」）。

「鹿嶋祭　楠木正成の躰　町々をくねり廻り　歯かための干餅を家にて上げ　又たべる」（「小野月香日記」明治20年旧6月1日の条）

以上のように，大館市では江戸期における鹿嶋行事の記録もみられる。現在，確認されている鹿嶋行事は米代川の北側支流では黒沢・新沢・長面・大森・花岡本郷・繋沢・土目内，南部支流では二井山，そして米代川流域の大館・舟場などがある。大館市史にも詳述しているが，ここでは姥沢の事例をあげておく。

「姥沢では6月10日に行っていた。人形は三体で男が二体，女が一体，男は旦那と船頭で，女は奥さんと呼んでいた。足にはワラジをはかせ，船頭には櫂をもたせ，それぞれに〝鹿嶋大明神〟と書いた紙の幟をつけた。顔は神官がきてから紙に書いてもらい，できあがると神官にご祈祷してもらった。儀式がすむとムラ中をまわるが，人びとは一体ずつ計三本のタンポを供える。川につくとローソクに火を灯し太鼓・笛の囃子で流してやる。

事例26　能代市[6)]

「鹿嶋祭」

『秋田風俗問状答』によれば，船は神力丸といい，人形は義経・弁慶・樋口次郎の三つである。

事例27　秋田市新屋[7)]

「鹿嶋祭り」　旧5月21日

5月に入って鹿嶋祭りが近づくと各町内ごとに若者たちが集まり，船をつくってその準備をし，男児のいる家ではそれぞれ前夜から五色の紙をつぎあわせて「鹿嶋大明神」と書いた吹流し旗を持った武者人形（俗に鹿嶋さんという）に笹巻・御神酒をそなえて一同がお参りするのである。

当日は各家から笹巻を首にかけた鹿嶋さんを持参して，馬車にのせた船に飾り，このあいだに子供たちは鉢巻姿も雄々しく思い思いの服装をして出発の用意をするのである。やがて鹿嶋さん全部が出そろうころになると鹿嶋大明神ののぼりをもった一同を先頭に馬車につけた綱を引いた子供たちがこれに続き，歌声も勇ましく行進をはじめ，まず日吉神社に参拝して祈祷をしたのち各町をまわる。こうして町内を一巡し終った鹿嶋は午後から川または海に流すのである。

この時，太鼓の音も勇ましくつぎのような歌をうたうのでとてもにぎやかである。

「ショッショッショッ，鹿嶋の送りましょうショッショッショッ寺のかげまで送りまでしょ」この意味は鹿嶋さんをお送りしましょう。寺のかげまで送りましょうというので，むかしは天龍寺のかげまで雄物川の流れがあったという。

事例28　秋田市登町（旧追廻一御舟町）[8)]

「鹿嶋流し」　旧5月25日

般若面を用いて悪魔を払い霊魂を供養する〝鹿嶋流し〟である。雄物川・太平川・旭川の合流点に位置するこの地域は，洪水の常習地帯で病厄がたえることがなかった。同地には慶応年間まで社寺はなかったが氏神があった。明治10年に鹿嶋神社を勧請し，ご神体である「三吉祥天妙音十羅刹大白龍王女面」を安置した。この般若面は疫病除の神霊があり，多くの人びとに信仰されてきた。

事例29　雄和町[9)]

「鹿嶋祭」　6月

豊作祈願。宵篭祭の翌日は鹿嶋町で萱藁などで船を

作り，藁人形をのせ，紙旗（「鹿嶋大明神」「鹿嶋・香取・息栖三社大明神」など）を帆柱に立て，太鼓など奏楽，雄物川に流して豊作を祈った。

事例30　協和町船岡[10)]

「鹿嶋祭り」

男女２体のワラ人形をつくり，葦船にのせ荒川に流す。船玉神社の例祭。

事例31　中仙町[11)]

「鹿嶋流し」　田植終了後

田植えがすむと，頭屋はカシマナガシのふれを出す，すると，かねて準備しておいた稲の苗をよく洗って乾かしたもので鹿嶋の頭部を作り，首から下の方はワラで作るのが普通である。「鹿嶋大明神」ののぼりを立て，腰には刀をさし，飯を背わせ，銭を頭のつぼか，ふところに入れる。これができあがると神棚の下において家内一同で拝む。これをカシマタテといって，休みとなる。翌日，頭屋の家に部落の人々が集って生木の枝を曲げ（長さ５ｍ位），鹿嶋船をつくる。そして青カヤで飾り立て，先の方に船頭鹿嶋をそえる。午後から家々の代表者が鹿嶋を持参し，神官から祈祷してもらって船にそえつける。やがて太鼓に送られて川に流されるのである。もとは，上述のように２日がかりであったが，いまは午前午後で，カシマダテとカシマナガシをすませるので，タテナガシといっている。

鹿嶋が川に流れると，子供らはいっせいに川に飛びこみ，頭のツボの銭をぬきとる。流し終えると頭屋の家で酒宴が催されるのである。

大神成部落では，長雨が続いて，害虫発生や洪水の心配があると，シリマツリをやるというふれを出す。すると，各家ごとにワラで40センチぐらいの人形を作り，これを鹿嶋さんといって，ひさしの屋根の上に立てて晴天を祈って休みとする。西が晴れると各家で人形を棧俵にのせ川に流すのである。

事例32　仙北郡[12)]

「鹿嶋流し」

等身の藁人形を藁馬にのせ，鎮守の社の前にたて，各戸でも高さ50センチメートルほどのチョンマゲの藁人形を作り屋根の上にたてる。雨がやめば人形を板舟にのせ，お供えや燈明をあげ，川に流す。これを鹿嶋流しという。

事例33　横手市[13)]

「鹿嶋まつり」　６月（田植え後）

この祭りは，６月と限らず田植えすぎなどにする。家々で鹿嶋さんの人形を作って，お祭りをして，柴と藁で作った舟にのせ，部落の人たちの笛・太鼓の音におくられて川に流される。五穀成就・家内安全・疫病退散を祈るものである。

また，神官のご祈祷をうけた鹿嶋さんの木札を部落の出入口に結びつけて，疫よけ・部落の安全の守りとし，しめ縄と大きな草鞋（わらじ）を部落の古木にかけて，鹿嶋まつりをしているところもある。

事例34　大雄村藤巻（写真１－２）・平柳[14)]

「鹿嶋流し」

藤巻・平柳に立てられている大ワラ人形は，ヤクジンサンともカシマサマとも呼ばれており，これとは別の日の鹿嶋流しには各家でつくったカシマ人形を流す。

鹿嶋様は，ワラ20束，おとな25人で半日かかって作り，部落のはずれに立て疫病が侵入するのを防ぐ。ケダニよけでもある。

事例35　平鹿町浅舞中野

「鹿嶋送り」　７月18日

中野地区は地盤が軟弱なことから，地震を抑える神として鹿嶋様が信仰されてきた。同地区は12戸で構成されており，各家々でつくった武者人形12体を村の鎮守様である鹿嶋様の杉の広場に集めて拝む。

事例36　平鹿町醍醐荒処（写真１－３）

「鹿嶋さん」　８月20日

村の入り口の杉の木に大草鞋をかけている。これを鹿嶋さんとよんでいる。この鹿嶋さんは，疫病退散・厄祓いの神として信仰されている。大草鞋は長さ６尺・幅３尺である。これほど大きい草鞋をはく人が村にいますよという知らせであり，その人とは村の開墾の祖・大肝煎佐藤利右エ門弥惣を指したものだといわれている。

事例37　山内村黒沢（写真１－４）

「鹿嶋様」　旧４月８日または４月１日，４月15日

高さ4.1メートルの頭部木製のワラ人形である。カサ状の帽子をつけている。以前は国鉄・北上線沿いの田代沢の峠道（岩手県との県境）にあった。現在は，国道107号線の県境にある。陰陽物をもつ男性人形道祖神である。田代沢では，昔，東方より悪病が流行し住民が苦しんだので，この地で悪病を追い払うために

鹿嶋様をたて祈願したといわれている。

事例38 大森町[15)]

「鹿嶋流し」「鹿嶋塔」

剣花山に鹿嶋神社を勧請したのは長暦2年（1038）と伝えられ，この大森の地方に早くから鹿嶋信仰が芽ばえ，講中もでき，鹿嶋流しの行事は，昭和の初期まで盛んに行なわれた（照井家古文書）。

鹿嶋流しは地震をゆり起こす大鯰を退治するために鹿嶋大明神を舟で旅立たせるものだといわれている。昔は各町内，各部落毎に鹿嶋講があった。

古老の話によると，旧大森町では，鹿嶋舟をかついだ若者たちが，日頃のうっぷんをはらす吐け口を特定の家を目掛けて突入し，大損害を与えるなどの騒ぎもあったということである。

村々でも鹿嶋流しをきっかけに，村同志のけんかになったこともたまたまあり，鹿嶋流しの行事も大方取止めになってしまった。

近年，大森町商工会の肝入で，旧町内の鹿嶋流しは親子会の行事として復活し，子供鹿嶋に田楽炉籠も添えられ，昔の荒々しさはなくなり，まことに優雅な子供行事となった。

鹿嶋大明神の塔は，町内至る所にあるが，建立年月を明記している塔は，昭和年代のものばかりである。これは昭和年代になって鹿嶋流しの行事を取り止めにし，その代りとして鹿嶋塔を建立したためである。

中ノ又，末野等には，3メートル以上もある藁人形の鹿嶋様を毎年新しく村境にたてている。

板井田部落に伝わっている「じじばば流し」は，単に鹿嶋流しとだけは言い切れないものがあるようである。じじ・ばばの人形は男女の道祖神に作られ，各家々からは小豆餅をもちよってたくさん背負わせて，川へ流すのである。餓死者の慰霊・道祖神祭り鹿嶋流しなどの複合したもののように思われる。

事例39 大森町末野[16)]

「鹿嶋送り」　旧暦6月7日

ムラの人々が力を合せてショウキサマの大ワラ人形をたてる。この日，各家では稲の苗とガツギを材料にして「カシマ人形」を作り，門口の柱にくくりつけておく。6月9日のカシマ祭にはこの人形をあつめ，木の枝とムシロで作った舟に乗せて川へ流す。今では，ショウキサマ立てとカシマ送りは同じ日に行っている。

事例40 大森町川西[17)]

「鹿嶋流し・疫神送り」

古来何れの時に始まりしか今更詳かならずと雖も，当地に鹿嶋流し疫神送りなるものあり。之等に関して少しく述べん。

鹿嶋送りは，例年挿秧の季節を終り，草取り前に随時に之を行ふ。其の作方は藁にて武者人形を拵へ，鹿嶋大明神と記せる紙旗を其の背に負はせ，刀を佩はしめ，手槍を持たしめ，毎家の軒頭に立て置く事ト七日間，其の期日に至り之に供膳し，神酒を進め，多少の草鞋銭と兵糧を持たしめ，而して，役所の前に持参す。役所にては兼て此の人形を載せんが為，船（藁菰にて造る）を造り，家々より持ち来たりしものを配列し，皆舟中に納むる時に神官来りて之を祈祷し，肝煎，郷人附添いの上，神官と共に之を川前に送る。舟は勿論若者共に曳かしむ。而して，此処にて亦神官の祈祷あり。終りて之を川に流すは其の例なりしが，此のことは，明治九年迄は年中行事の主なることなりしが，爾来廃れて其の事なし。

疫神送りは，是も何れの年に始まりしかを尋ぬるに由なしと雖も，因襲の久しき遂に俗なし，慣例により鹿嶋送りをなせし。其の夕は，必ず此の疫神を造りしなり。其の状は爺媼の二軀にして，之も藁にて造る。其の丈け四・五尺にも余りなん。体の回りも之に準じ七五三縄を腰に巻かしめ，藁の編笠を頂かしめ，手には団扇を持たしむ。之総て若者等の細工なり。この二軀をば役所の札の木（今の役場の掲示場の如きものにて一郷の掟を掲げ置く処）に建て之を七日間留め置き其の晩に至り肝煎，郷人は元より若者一同相集り，神官の祭告を了り，神酒供膳をなす等ありて後，若者小児等に至る迄藁炬火を燈し，肝煎，郷人は袴羽織に提灯を持ち，此の爺媼の後べにつき送りて万太渕に至り藁炬火を集めて之を燃やし，其の火光のある中に神官の祈祷を了り，終に之を該渕に流し入るるを以てこの事の了りとす。然るに此の疫神を送るに先だち若者（下人奉公の者）等，一週間の休業を請求するは例なりき。其は疫神の懐中せる書附に依るものなり。即ち次の如し。「我等事足痛の為め七日間当地に滞在し，若者共の見送りを得云々」。依て若者共に七日間の休を与へられたしとの意味のものなりき。此の慣例も今も廃れて，只其の一班残すのみ。

県内のおもな鹿嶋様

写真１－１　平鹿町田舎

写真１－２　大雄村藤巻

写真１－３　平鹿町醍醐荒処

写真１－４　山内村黒沢

写真１－５　湯沢市岩崎

写真１－６　東成瀬村谷地

参考のため，其の書附を左に示すべし。

我等の二人は南部通りの者に候処，途中足痛の為め当村に壱週間滞在致，万太郎渕迄下男共に送られ度，其慰労として下男共へ直ちに一週間休日を与へられ度奉願候也。

厄　神

部落協議委員　御中

事例41　湯沢市柳田[18]

「鹿嶋送り」　旧6月24日

むかしは，部落の両はずれに一体ずつ祭られていた〝鹿嶋さん〟に感謝の一つとして始められたが，いまはその跡のくぼ地に，ワラで作った灯を投げこむだけである。神体を城主小野寺左衛門守。子どもたちがワラで作る丈余のタイマツを手にし，太鼓のはやしで部落をまわり，昔ご神体を祭ってあったくぼ地に燃え残りのタイマツを投げ込む。

事例42　湯沢市岩崎[19]（写真1－5）

「鹿嶋様」

千年公園の八幡神社の裏手に高さ4メートル以上もある大ワラ人形男女一対をおいて悪疫退散の祈願しているが，これを鹿嶋様といっている。

「カシマサマ」　旧3月17日－旧9月1日

岩崎の八幡神社境内の水神社の裏に大木によりかかるようにして立つカシマサマが二体ある。それぞれに白木の面がつけられ一方は口をひらき他は閉じた阿吽の形相をして男女一対の人形とされている。

事例43　東成瀬村椿川谷地（写真1－6）

「鹿嶋様」　旧6月1日

椿川地区では，旧暦6月1日（新暦7月21日）に虫送り行事を行っている。この日，家々では虫除け札を各家の田に立てる。同時に村の上下入口にあるだ円形の石塔に注連を張り，岐神のお札をたてて拝む。この石塔を鹿嶋様と呼んでいる。椿川地区では，桧山台・草ノ台・菅ノ台・大柳・天江・谷地に2～3の鹿嶋様がある。この日は，輪番制の宿で神事を行い，夕暮時に太鼓を打ちながら村境の鹿嶋様に向う。鹿嶋様に注連を張り，岐神のお札と神酒・肴・灯明を供え拝む・その後は，各自が重箱を持参し，宿で酒宴をもつ。

事例44　皆瀬村貝沼[20]

「疫神おくり」・「鹿嶋祭」

疫神おくりの藁人形であって，陰暦3月20日に村の若者が藁を以て作る。そして土名を「鹿嶋参」と呼ぶといふ。

柳田氏[21]は，鹿嶋舟・鹿嶋人形について，次のように述べており，県内の鹿嶋行事の要約にかえたい。

「カシマナガシ。秋田県内の鹿嶋舟は，多くの土地ではもう年中行事となり，神送りの必要の有る無しを問はないやうである。大曲の町では5月27日（民族3巻4号），秋田では近年旧5月15日にこの鹿嶋祭を挙行したといふが（風俗画報456号），能代や津軽の深浦は共に4月8日，八郎湖畔では旧5月晦日に之を行ふ例もあった。文化7年かの大地震以来殊に地震のない常陸鹿嶋の御社を慕うて，この舟祭をする国が盛んになったとも謂っている（軒の山吹）。しかし，仙北郡の生保内などでは，今でも鹿嶋流しは年中行事では無い。ただ，旱の年に雨を祈る臨時の式として，等身の藁人形に紙の衣・紙の烏帽子を着せてただの舟に乗せ，太鼓打ち笛吹きが是に乗込んで，川を下りて送って行く習ひであった（郷土研究6巻2号）。」

「カシマニンギョウ。但しこの多くの鹿嶋舟に共通な点は，舟に人形を載せて送ることで，他の府県の送り舟でも，類例は有るのか知らぬが，私はまだ聴いていない。深浦の鹿嶋祭でも数多くの人形を小舟に乗せ，笛太鼓ではやしつつ送って出て海に流したといふが，舟と共にであったかは明らかでない。能代の神力丸も三つの人形を載せたとある（秋田風俗問状答）。是は恐らく舟と共に流したのであろう。大曲の鹿嶋祭では流すべき舟を柴で作り，是に鹿嶋さんといふ人形を載せ，又焼餅を其舟に積込んで川に流すといふ（民族3巻4号）。しかも此人形は，本来必ずしも舟に載せて流すものとはきまって居なかったのである。同じ羽後国でも平鹿郡の或村などでは，盆を過ぎてから之を作って村の境に立てて置いた。目的は疫病の防衛に在ったらしく，処によっては是を鹿嶋人形とは謂はず，草仁王とも又午頭天王とも呼んで居た（雪の出羽路）。近年は北秋田の方では是をドジンサマと謂ふらしい。即ち土人であって，人類学者の教えた新語では無かったかと思う。」

Ⅱ　雄物川町深井の鹿嶋行事

1　雄物川町深井の概要

雄物川町深井は雄物川東岸の平坦地に位置し，幾度

となく水害に見舞われた地域である。西は大字大沢の山川で境とする。寛永～寛文の頃，梅津半右衛門の家臣石川五郎兵衛がこの地を新墾し，開田に成功した。「秋田風土記」(文化年間）には戸数87とある。「雪の出羽路」(文政年間)には家数83人，数394，馬数29とある。明治の中頃までは物資輸送の大動脈であった雄物川の舟着場としてにぎわい，本荘街道の要衝でもあったため，雄勝・平鹿２郡の物資の集散地であった。明治22年平鹿郡福地村の大字となり昭和30年からは雄物川町の大字となった。深井地区は上・中・下深井地区で構成されていたが，昭和22年の大洪水のあと雄物川の改修工事により 120 戸あった集落のうち下深井地区を中心に63戸が大巻地区に集団移転した。現在，総戸数107戸，うち上深井16戸，中深井16戸，大巻60戸，末館15戸で形成されている（図２）。

現在、雄物川町では，26ヶ所で鹿嶋行事が行なわれている（図３）。そのほとんどは、鹿嶋送りの行事であって，人形道祖神としての鹿嶋様と鹿嶋送りの人形祭が重っている。送り出す人形は，雄物川や内陸部の大宮川・石持川・そのほかの小河川に流している。

2　鹿嶋行事の地域的・歴史的背景

深井の鹿嶋行事の起源については不詳であるが，雄物川町の小沢文兵衛秀興（可楽斉）が自分の子供たちに「此書ハ年中勤ねハならぬ世の中の儀理と，喰ねハならぬ事をかき伝えり」として弘化３年（1846）に著わした「歳中必要日記」に，「六月十八日，鹿島祭，餅搗きをし，夜には灯籠をつける」とある[22]。江戸期にすでに“鹿嶋祭”の年中行事を行っていたことを示してはいるものの，その起源，行事の詳細については明確でない。福岡芳郎深井部落会々長によれば，「深井の鹿嶋行事はいつ頃からはじまったかは不明だが，古老の言によれば，かつて，流行病が頻発し，ツツガムシなどの疫病が多く発生したため，病魔の厄祓いとして夏の流し行事となった。現在は五穀豊穣・交通安全祈願などの行事としている。」と述べている。

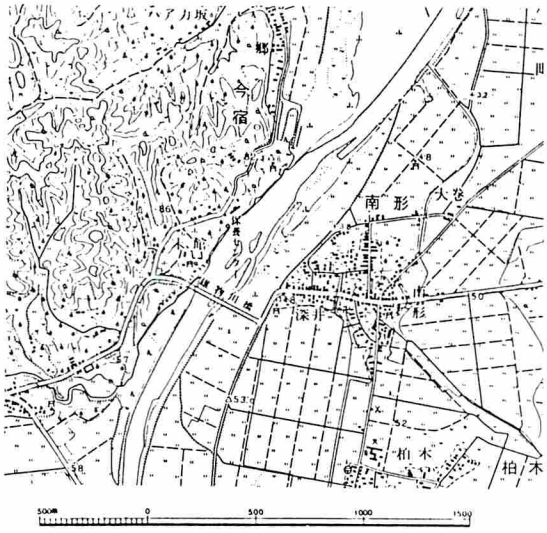


図２　雄物川町深井の地勢

深井の鹿嶋行事の史的背景を災害・疫病等から考察することができよう。雄物川町の天災[23]は水害・冷害がその主なもので，これに次ぐものが旱害・震災であった。ことに，雄物川流域の洪水は古来，毎年のように氾濫が繰り返され，そのたびに生活を苦しめられた。雄町川町史によれば，文化元年（1804），９年，嘉永５年（1852），明治12年，15年，27年，29年，30年，36年，37年，40年，42年，43年，44年，45年，大正２年，６年，７年，15年，昭和22年，23年の大洪水は大きな被害をもたらした。特に，明治27年，昭和22年，23年の水害は大惨禍であった。昭和22年７月22日の大洪水は，深井地区 115 戸，南形地区62戸の全戸が床上浸水の被害をうけた。深井地区の宅地の浸蝕は著しく後に恒久的堤防建設運動を展開した。昭和30年に大堤防が完工し，深井地区の大半の宅地が河原に変貌し，南形字大巻（63戸）に集団移転した。雄物川の洪水は水害，凶作さらには伝染病などの疫病の脅威をもたらし，人心をまどわし生活の不安を与えてきた。それだけに，藩政時代から続いた備荒貯穀の精神を涵養し，郷倉に貯穀された。雄物川町では，深井の郷倉を含め16ヶ所に建立された。それだけに共同体意識は強固であった。

一方，洪水等による伝染病などの衛生行政も推進されてきた。明治19年における福地村の伝染病予防費が予算総額の 9.1 %を占めるほどであった。また，洪水の危険にさらされた福地地区では，その都度浸水家屋に清潔法施行する議決がなされた（明治30年・雄物川町郷土史）。福地地区のおもな伝染病に関する旧福地村事務報告のいくつかを取りあげてみると，

「洪水あり，深井部落には警官と共に戸々につき合法

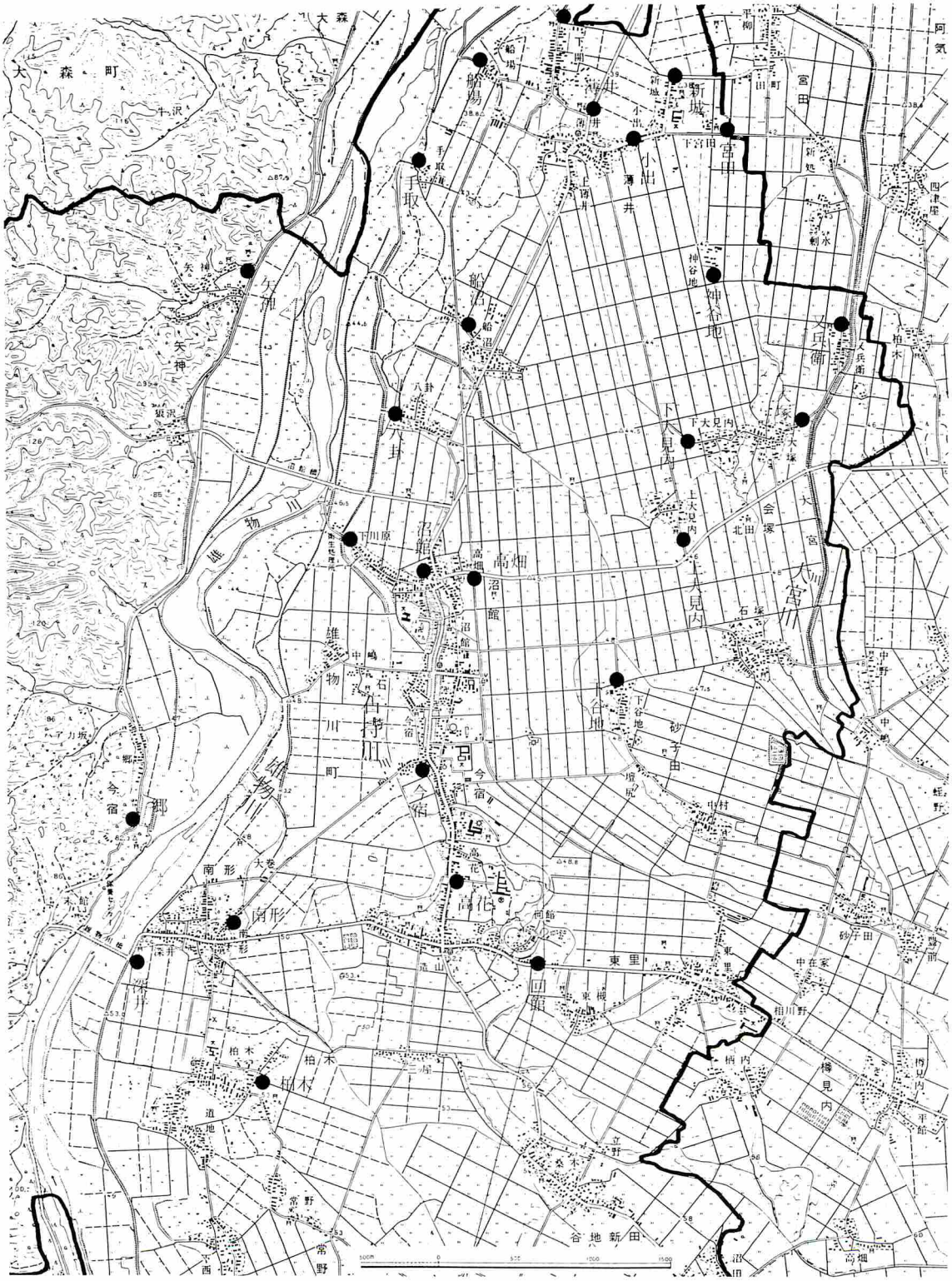


図3　雄物川町の鹿嶋行事の分布

施行を従す」（明治27年）。
「深井・柏木部落に赤痢患者（各一名）発生死亡す」（明治29年）。
「伝染病は西野部落に実布垤利亜一名全治，深井部落に格魯布一名」（明治30年）。
「伝染病は南形部落に三名発生し一名死亡」(明治33年)。
「伝染病患者は十四名発生，その内死亡三名全治多く撲滅」（明治36年）。
「水害のため腸チプス患者六名発生，内二名死亡」(明治43年)。
「深井部落に腸チプス患者三名発生，内一名死亡」(明治44年)。
「道地部落に腸チプス患者二名発生，内一名死亡」「種痘においては無料接種を行なう」（大正元年）。
「腸チプス患者道地一名，深井一名発生，内一名死亡」（大正14年）。
「腸チフス患者一家四名発生全快」（昭和元年）。
「伝染病患者深井部落に一名発生」（昭和５年）。
などがある。これらの伝染病は，前述の主要な洪水時に発生したものである。

明治以前の医療機関の記録はなく，薬草・置薬（富山県の売薬）にほとんど頼っていたものと考えられる。大正年代から無医地区になった福地は昭和13年に診療所が開所するまでは他地域の開業医に依存した。それだけに災厄に対する備えも乏しかった。

雄物川の沿岸に位置する福地地区の西野・道地・深井の各集落は，古来，水害と闘い，ケダニ病に悩まされ，まさにケダニ地獄から逃れることのできない宿命にあった。雄物川町のケダニの生息地（道地一禿川段・大沢向野・上川原，下西野一中畑・蘭場，上西野一柳原・柳原砂山堰）は雄物川に注ぐ（放水路）上・下流付近50メートルくらいの範囲であるが，水害時には特定以外でも被害にあった。明治33年から昭和23年までの間に55名の死亡者があった（「雄物川町郷土史」）。それだけに，ケダニの生息地にはケダニ地蔵尊がある。深井深徳寺境内にもケダニ地蔵尊があり，以前は６月24日に祭典を行っていた。現在は８月24日に行っている[24]。

雄物川の自然の脅威，その環境と風土に対して，先人は自己の力の限界を知り，他の大きい救いの力を求めて信仰が芽生え，天を仰いで神に祈り，地を愛して餅などを搗いて神に供え，酒を汲み交して労をねぎらい，無病息災・豊作を祈願したのであろう。今日伝承されている鹿嶋行事も当該地域における地域的・歴史的風土を背景として，また村落共同体の一員として果たさねばならない義理であり，生きるための年中行事の一つであったのではないだろうか。

3　深井の鹿嶋行事の概要

深井の鹿嶋行事は，同地区の八幡神社の八幡講組織によって，毎年７月16日に行なわれている。この鹿嶋行事は，人形道祖神の鹿嶋様と鹿嶋送りの鹿嶋人形との組合せ行事である。鹿嶋祭はムラの行事であり，送られる人形は，家ごとに作られる。人形道祖神が立てられている地域と鹿嶋送りと称する人形祭を行なう地域が重っている事例は，秋田県内では少なくない。雄物川町の小沢文兵衛秀興が著わした「歳中必要日記」（弘化３年）に，「六月十八日，鹿島祭　餅搗きをし夜には灯籠をつける。」とある[25]が，人形道祖神と鹿嶋送りの行事の全容を知ることはできない。現在は，五穀豊穣・村中安全・無病息災・交通安全などを祈願する行事となっている。

７月16日には，人形道祖神の鹿嶋様と家ごとにつくられた鹿嶋人形をのせた屋形船が，笛・太鼓・鉦・鼓などの鳴物・拍子にあわせて各家々をねり歩く。屋形船では，小学生（４～６年生の女児）が手踊りを披露する。一巡すると武者人形を流し舟にうつし，雄物川に流す。流しの行事が終ると鹿嶋様は雄物川橋のたもとにすえられ，年番監督の家で直会をする。屋形船はかつては上深井・中深井・下深井の各地区及び八幡講中・親方衆（地主・３台）の７台ほどが作られたというが，現在は八幡講中の１台のみである。

昭和57年７月16日の鹿嶋送り行事の経過は次のとおりである。

○午前９時30分～
人形道祖神〈鹿嶋様〉の製作，屋形船の組立開始。
製作場所一八幡神社境内
製作担当者一鹿嶋行事執行年番（12名）及び年番監督（２名）
製作指導者一佐々木善一（35才）
（この間，各家々では朝に餅搗きをし，鹿嶋人形をつくる。）

○午後５時～

各家で製作した鹿嶋人形を屋形船にのせる。

○午後６時30分～

屋形船にて厄祓い神事

○午後７時～

屋形船にて小学生（４～６年の女児）による手踊披露，鹿嶋巡行出発（順路：八幡神社～末館～中深井～上深井～大巻～中深井～八幡神社，図５参照）

○午後10時30分

八幡神社前にて屋形船の鹿嶋人形を鹿嶋舟にのせ，雄物川の河川敷に移動，雄物川に流す。

○午後11時～

人形道祖神〈鹿嶋様〉を雄物川橋のたもとにすえる。年番監督の家で直会。

鹿嶋人形は，かねて準備していた稲の苗をよく洗って乾かしたもので頭部をつくり，首から下の方はガジギを材料とする武者人形である。“鹿嶋大明神”ののぼりを立て，そののぼりにはその家の男児の名前を書く。腰には刀をさし，手槍をもたせる。背には苞に入れた餅を背負わせる。各家々では，鹿嶋人形ができあがると神棚の下において家内一同が拝み，屋形船にのせる（写真２）。

写真２　雄物川町深井の流し鹿嶋

４　鹿嶋行事と八幡講組織

深井の鹿嶋行事はムラの祭りであり，その運営は八幡神社の講組織（図４・５）によって実施されている。八幡講は深井地区（上深井・中深井・大巻・末館）の全戸（107戸）で構成され，地縁的に12組編成となっている。上深井２組（16戸），中深井２組（16戸），大巻

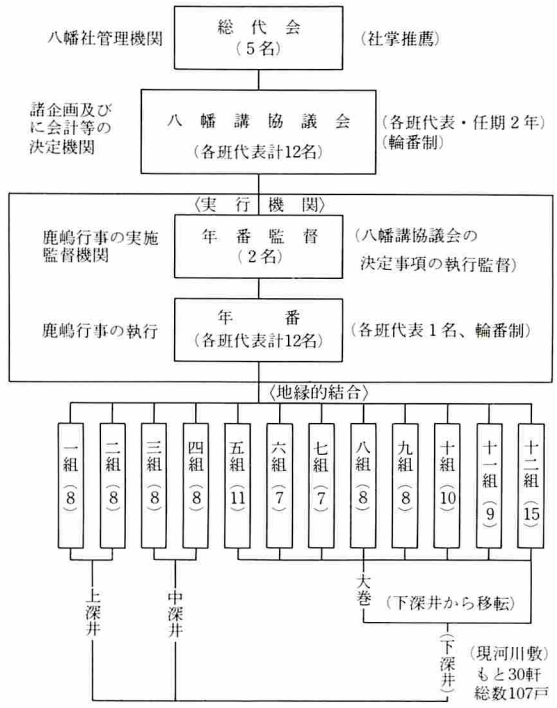


図４　鹿嶋送り八幡講組織

7組（60戸），末館1組（15戸）となっている。1組平均約9戸で形成されている。八幡講の上部機関として総代会，八幡講協議会がある。総代会は社掌が推薦する5名によって構成され，八幡神社の管理機関となっている。総代会の下に八幡講協議会がある。八幡講協議会は各組の代表（任期2年，輪番制）12名で構成され，八幡講の諸行事の企画・会計等の決定機関となっている。

鹿嶋行事の実行機関は年番監督・年番があたる。年番監督は，八幡講協議会の2名が同協議会の決定事項を執行監督する任にある。年番は各組代表（輪番制）の12名で構成され，年番監督の指示にしたがって鹿嶋行事を執行する任にあたっている。

年番・年番監督は，鹿嶋様や鹿嶋舟の製作準備及び製作の外，屋形船の組立て・飾りつけ，手踊りの指導，鹿嶋巡行の実施，流し行事の執行，予算の執行など，鹿嶋行事に関するすべてを執行することになっている。

しかし，鹿嶋様の製作に関しては，年番が輪番制になっており，深井地区での唯一の技術伝承者である佐々木善一氏の指導をうけている。また，鳴物，拍子に関しては，年番構成員では不十分であって，地域内の経験者が毎年つとめている。手踊りは年番の家の女児が担当するために，その指導は年番の主婦があたっている。

5　鹿嶋様・鹿嶋舟の製作工程

深井の鹿嶋行事は，現在八幡講組織によって運営されているが，かつては若者組の行事であったという。戦後，鹿嶋行事に関する技術伝承者が老令化したために後継者問題がでたのであった。特に，鹿嶋様の製作技術は昭和40年代には同地区の伊藤嘉一郎氏（1886－1972）のみとなった。昭和42年に青年会の有志10余名が伊藤嘉一郎氏から鹿嶋様や流し舟の製作技術や鳴物・拍子を学んだのであった。ときに伊藤氏は71才の高令となっていた。一時，鹿嶋行事は青年会が中心となって実施してきたが，青年会のメンバーが勤務の関係等で転出する者が多く，現在は佐々木善一氏（農業，雄物川町農業委員，昭和22年生れ）が唯一の技術伝承者になった。佐々木氏は伊藤氏の隣家におり，伊藤氏に接する機会も多かったという。

佐々木善一氏の伝承している深井の鹿嶋様・流し舟の製作工程は次のとおりである（数字の単位は㎜）。

材料～ワラ，ガジギ（マコモ），エビクサ（エビモ），槻木（つきのき），杉，杉葉，ゴザ，タワラ，シベ，縄

製作用具～ノコ，ナタ，ハサミ，クマデ，カッター，キネ

その他～毛筆，墨，奉書紙

鹿嶋様の製作工程

(1)　材料の準備，吟味，ワラ打ち，シベ抜き

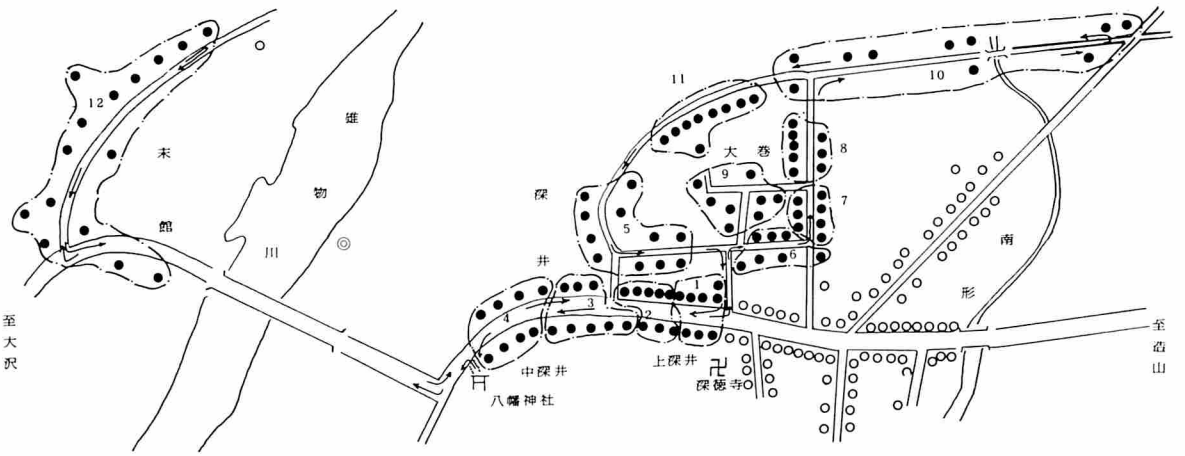
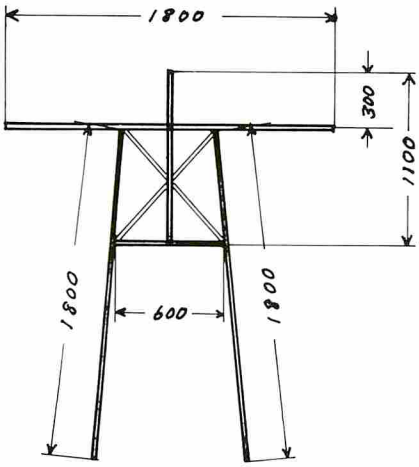


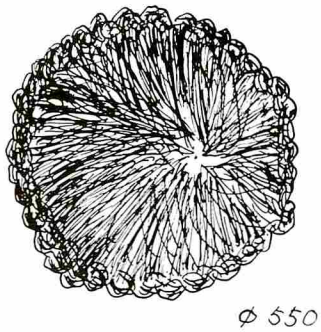
図5　雄物川町深井
鹿嶋送りの八幡講組（昭和57年現在）

● 八幡神社講中　　○ 南形地区　　——-——-—— 講組範囲（1～12組）

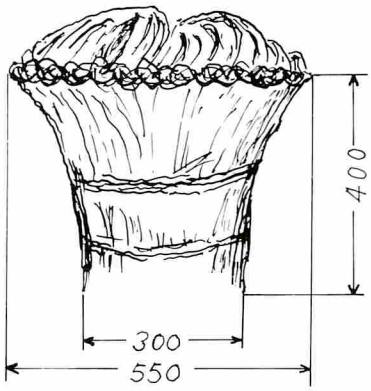
→ 巡　行（コース）（八幡神社出発）　　◎舟流し場



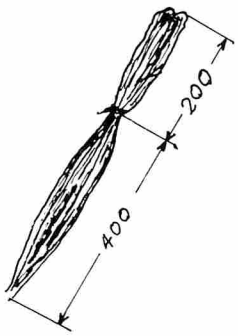
鹿嶋様の骨格



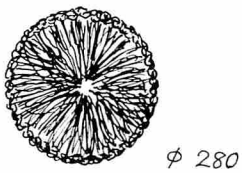
男根（正面図）



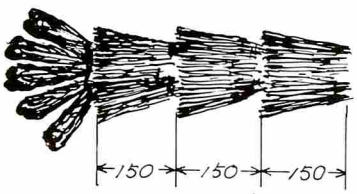
男根（側面図）



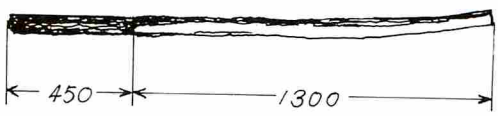
指（手・足両用）



乳房・臍・鐔



上　　腕



刀　　剣

図６－１　実測図（鹿嶋様）

(2) 装具の製作～槍（槻木・12尺），幟（槻木・12尺），刀（槻木・1750，柄 450・峰 1300），鐔（ワラ・φ280）
(3) 骨組～(槻木・上幅1800，高さ1800，中棒600，中軸1100)
(4) 足・手の製作・取付～(ワラ・全長600，指の長さ200のものを5本一組とし，手・足各2組)
(5) 脚・上腕の取付～(ワラ・各3段付，段幅150)
(6) 胴付～(ワラ・シベを内にゴザジメ，乳房・臍φ280)
(7) 男根の製作・取付～(支え棒・槻木600，男根φ550，長さ400)
(8) 頭部の製作・取付～(面書き～墨書き・模造紙又は木綿，頭部はタワラづくり)
(9) 頭髪・髭・陰毛の取付～(エビクサ)
(10) 装備装填～(幟・刀・槍)
(11) 輸送台取付～(リヤカー)

鹿嶋舟の製作工程

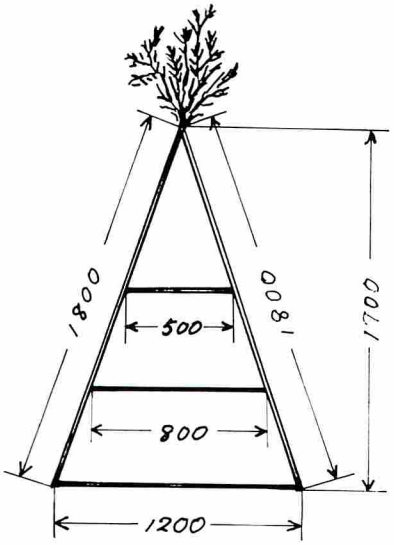
(1) 骨組～(舳先・杉葉，船側・杉1800，艫1200，横軸・槻木～500，800)
(2) 船底取付～(ワラゴザ)
(3) 船側取付～(ワラジメ)
(4) 帆柱取付～(槻木・長さ1100，張縄)
(5) 帆の取付～(紙製・上辺680，下辺480，船名：鹿嶋丸)

実測図（図6）

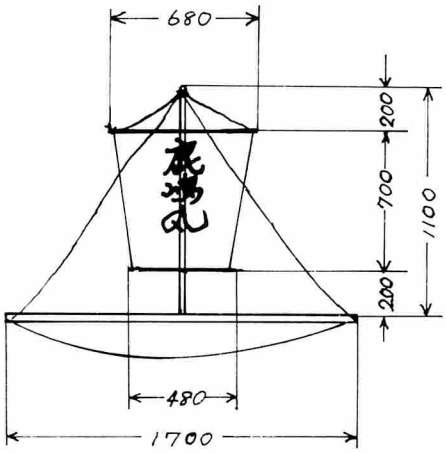
おわりに

東日本に連綿として及んだ鹿嶋の神威は，現今の祭頭の行事に遠くから崇敬者が参拝することにも，神宮の娘を卜食によって補佐するとの伝統を保った鹿嶋の物忌の権威にも，また毎年作物の豊凶や一年の運勢を村々に告げるべく神宮の一部を派遣した鹿島の事触れ，弥勤踊ともいわれた神事芸能たる鹿嶋踊や夏の流し行事の一種である鹿嶋送り・鹿嶋人形の行事にも，それぞれ濃厚に示されている。

ことに，秋田県は夏の流し行事の一種である鹿嶋送り・鹿嶋人形の行事が盛んである。この鹿嶋送りは，鹿嶋信仰から派生した神送りの一種で，災難が村に襲いかかってくると，それをもたらした悪神を追放するために人形をつくり，人形に悪神を追いこめて村境に追い出すという呪法である。秋田県では，豊作祈願・害虫除け・地震除け・雨乞い日乞い・厄神流し・大漁・海上安全・流行病除け・悪疫悪害退散・火伏せなど多様な願いをこめた行事であった。鹿嶋は船を自在に扱う力をもつ航海守護神であり，また大和朝廷が東北



鹿嶋舟の骨格



鹿嶋舟（正面図）

図6－2 実測図（鹿嶋舟）

開発に際して征討軍の異郷への行路を守り，敵軍を霊威で追いはらう軍神・武神など，鹿嶋信仰の多元性によるものであろう。

秋田県の鹿嶋行事の一つの特色は，人形道祖神が立てられている地域と「カシマオクリ」と称する人形祭を行なう地域が重なっているところにもある。いずれか一方だけを行う所もあるが，この両方の人形を作る村もある。雄物川町深井の鹿嶋送りの行事は人形道祖神としての鹿嶋様と鹿嶋送りの人形祭が重ったものであり，その典型といえよう。神野氏[26]は「人形道祖神と他の人形との組合せには，(1)大きい道祖神の形と小さな人形が重なる場合，(2)ムラでつくる道祖神の人形と，家でつくる人形が重なる場合，(3)ムラ境に立てておく道祖神の人形と，川に流したり，焼いたりして送り出す人形の重なる場合」を指摘し，「この重なり合いを手がかりに人形の相互の関連を鮮明にしていくことができるのではないか」と述べている。

雄物川町深井の鹿嶋行事は，鹿嶋祭はムラの行事であって，そこで送られる人形は家ごとにつくられ，人形道祖神の鹿嶋様と鹿嶋送りの鹿嶋人形との組合わさった行事である。すなわち，ムラで作る人形道祖神と家ごとに作る鹿嶋祭の人形との重なりが，立てる人形と，送り出す人形との関係になっている。このような形態は平鹿地方に顕著にみられる。

秋田県の鹿嶋行事は，鹿嶋送りが支配的ではあるが，人形道祖神・石造道祖神・大藁草鞋の道祖神をもカシマサマと称する地域もあり，また，人形道祖神や虫送り行事の人形・彼岸人形，その他，多くの人形送り行事と重なる地域も少なくない。

折口氏[27]は，「一般に，人形のある行事習慣は，禊ぎの意味を含むものである。人形に流すものと，流さずに保存するものと二種ある。」「形代（かたしろ）を祭る習慣が出来てから流す形式と，流さずに祭る形式とに分れて来た。地方によると，実盛人形を先に立てて，虫送りの芸をし乍ら，村境まで行くところがある。古い習慣のあるところでは，実盛の草人形を作っている。此人形は，悪者の首領で，部下の悪者を引率して行って呉れる，大切なものである。人形祭りでは，神送りの方が主となっているが，七夕まつりには，神を迎える形が見える。」と述べている。また柳田氏[28]は，「昔の人形祭は思いきって素朴なものであった。それが現在の雛の節句になるまでは，何十段とも知れない変遷を経て居るのだが，しかも其以前の各段階は，今もまだ全く消え滅びては居らず，捜せば色々の痕跡が，村人の生活の中に見い出される。さばらえ又は実盛さんなどという虫送りの人形もその一つであれば，紙で最も簡単な人の形を剪って，身を撫でてから川に流すという六月晦日の大祓なども別の系統のものということは出来ない。」「素人細工で作りあげた人形という点は同じでも，それにも早くから二つの傾向が現われていた。一方は，一つの場所にすえて置く故に，ただ形を大きく又奇抜にしようとしていたに反して，他の一方は諸処に持ちあるくので，追々とこまかな技巧を加えて，その動作を面白く見せることを心がけるようになった。」「日本を二つに分けて，西の村々の人形には移動式が多く，東北には巨大な作り付けのものがまだあって，この方が一つ古いということまでは考えられる。」「北の方へ進んで行くと，ただむやみに大きな男女の像を造って，それを村はずれや家の門口に，立たせて置くだけのものが多くなり，何か魔よけの番人のように見られるけれども，是等もやはり一日の式が終ると，村境に送り出して置いている。もとの起りは双方一つであって，共に稲作の最も重要な時期に，部内を清浄にして災害の根を絶とうとする，是も一種のサバラヒであった。」と述べており，鹿嶋行事における他の人形行事との関係を示唆している。

本稿は，雄物川町深井の鹿嶋行事に関する事例報告であったが，今後も県内の多くの事例を調査し，検討していきたいと考えている。

なお，本報告の調査にあたって，雄物川郷土資料館の福岡新作・佐々木隆の両氏，雄物川町深井部落会々長福岡芳郎氏，同地区佐々木善一氏や平鹿町町史編さん室専門委員山田貞吉氏をはじめとする多くの地元の方々のご協力をいただいた。また，本館嶋田忠一氏からの協力をいただいた。ここに厚く感謝の意を表します。

註

1）菅江真澄は，「雪の出羽路」「雪のあきたね」「月の出羽路」「おがらの滝」などで，藁人形について述べている。この藁人形を「芻霊（ますらを）」といい，鹿嶋人形・草仁王・午頭天王・泥塑天子など，地域によって呼称の相違のあることを指摘している。

2）田口松圃（1928）：「鹿島舟と鹿島祭」（『民族』3－4）
柾谷　明（1966）：「蒭霊考－秋田の民族－」（『国学院雑誌』67－3）
神野善治（1976）：「東日本の人形道祖神」（『火内』9，大館市史編纂委員会）
神野善治（1979）：「わら人形を訪ねて－人形道祖神論への試み－」，「人形道祖神さまざま」（『あるくみるきく』144，近畿日本ツーリスト㈱，日本観光文化研究所）
今村泰子：「秋田県の歳時習俗」（『東北の歳時習俗』明玄書房）
中村亮雄（1948）：「資料鹿島祭」（『民間伝承』12－5・6）
上記のほか，多数あるが省略する。
3）神野善治（1978）：「人形送り」（『講座日本の民俗6，年中行事』）
4）1979年3月，緊急民俗資料分布調査報告書のサブタイトルを持ち，文化財調査報告書第66集として編まれた。
5）大館市史4（1981：大館市），信仰とまつり－カシマサマ（P490～507）に拠る。
6）日本の民俗5，秋田（1973：富木隆蔵著），鹿島祭（P217）に拠る。
7）新屋郷土史（1970：日吉神社編），年中行事の今昔・鹿島祭（P641～642）に拠る。
8）筆者の調査および鹿島神社縁起（1976）に拠る。
9）雄和町史（1976：雄和町），慣行と風俗・年中行事（P1019）に拠る。
10）秋田大百科辞典（秋田魁新報社）に拠る。
11）秋田県史・民俗工芸編（1962：秋田県），年中行事（P593）に拠る。
12）日本民俗学大系7・生活と民俗Ⅱ（1959：平凡社），民俗5呪（原田敏明筆・P308）に拠る。
13）横手市史・昭和編（1981：横手市），年中行事（P887）に拠る。
14）「東日本の人形道祖神」（1976：神野善治著）（『火内9』P60）及び秋田民俗事典（1968：井上隆明編・秋田経済大学雪国民俗研究所・横手平鹿P17）に拠る。
15）大森町郷土史（1981：大森町），鹿島塔（P883～885）に拠る。
16）「東日本の人形道祖神」（1976：神野善治著），（『火内99』P60）に拠る。
17）川西村郷土誌（横手平鹿総合郷土史：1981・総合郷土史刊行会，P1153～1154）に拠る。
18）秋田民俗事典（1968：井上隆明編，湯沢雄勝P3 P5）に拠る。
19）前掲11）（P594）及び前掲16）（P47）に拠る。
20）農村の年中行事（1943：武田久吉著），疫神おくり（P307～308）に拠る。
21）「神送りと人形」（1973：柳田国男著，定本柳田国雄集13，P470～471）に拠る。
22）雄物川町郷土史（1980：雄物川町），村の展開・年中行事（P310・313）に拠る。
23）前掲22），災害と公害（P887～895）に拠る。
24）前掲22），郷土の医療（P562～577）に拠る。
25）前掲22）
26）前掲2）
27）折口信夫（1930）：「年中行事(二)－民間行事伝承の研究－神迎え同じく神送り」（『民俗学2－10，P588～589）
28）柳田国男（1973）：「村のすがた・人形祭」（『定本柳田国男集21，P420～422）

文　献

赤田光男（1980）：「村落社会の構造と民俗理念」祭儀習俗の研究，弘文堂
秋山高志・北見俊夫・前村松夫・若尾俊平（1979）：「図録農民生活史事典」柏書房
萩原龍夫（1978）：「祭りの見かた・理解のしかた」，日本祭祀研究集成（2）－祭祀研究の再構成－，名著出版，
伊藤唯真（1979）：「祟り神・流行神」，日本の民俗7，信仰，有精堂。
本川桂川（1942）：「日本民俗図誌3，行事編」東京堂版。
民俗学研究所（1951）：「民俗学辞典」東京堂版。
宮田　登（1976）：「暮らしのリズムと信仰」，日本民俗学講座（3）－信仰伝承－，朝倉書店。
――――（1975）：「鹿島信仰の性格」，ミロク信仰の研究，未来社。

真野俊和（1976）：「兆・占・禁・呪ー俗信の民俗」，日本民俗学講座（3）ー信仰伝承ー，朝倉書店。
柳田国男・三木茂（1977）：「雪国の民俗」，第一法規出版。
民俗学研究所（1955）：「綜合日本民俗語彙集1」，平凡社
民俗学研究所（1953）：「人形送り」，年中行事図説，岩崎書店。
大塚民俗学会（1972）：「日本民俗事典」，弘文堂。
西角井正慶（1958）：「年中行事辞典」，東京堂版。

「平鹿郡醍醐下樋口の葛霊」

「村々入口に藁人形を立る。こは七月廿日あたりに此祭りあり，鹿嶋人形，という処あり，草二王という処あり，午頭天王といふ処あり，秋田ノ郡比内ノ奥山郷にて木にて造り丹青をなせり。世にいふ木偶人也，疫神を避ふの祭り也。」

（菅江真澄「雪の出羽路」より）

「大曲市の鹿島流し」鹿島人形と幣束

「5月27日，羽後（秋田県）仙北郡大曲町では，「鹿島流し」といふ行事がある。藁・柴・葦などで舟を作り，鹿島人形といふ人形をのせ，幣束・供物を供へて町中を練り歩き，後これを丸子川に流す。幣束は赤・藍・緑・黄・白の紙を重ねてつくる。」

（本川桂川著「日本民俗図誌」より）

雄物川町深井の鹿嶋様製作工程

写真３－１　原材料：稲藁、ガジギ（マコモ）
エビクサ（エビモ）、縄他

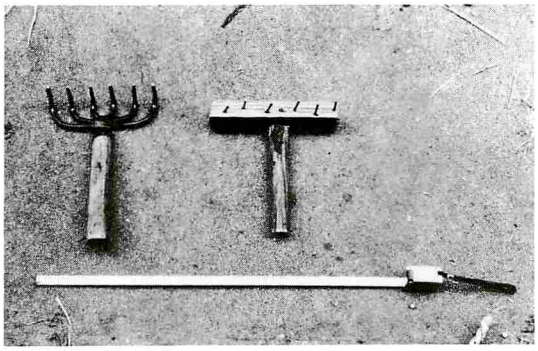


写真３－２　道具～シベ抜き用クマデ

写真３－３　稲　藁　打　ち

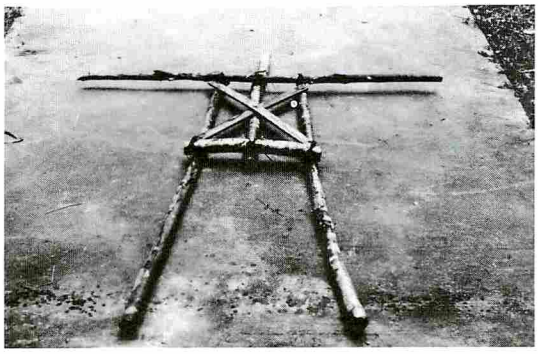


写真３－４　骨　　組

写真３－５　指（手・足）作り

写真３－６　指・乳房・臍

写真３－７　手・足の指組

写真３－８　し　め　縄

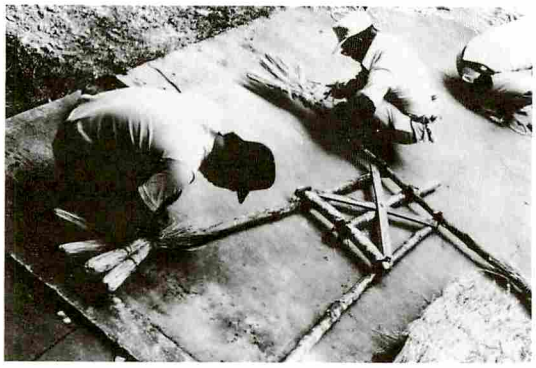


写真３－９　手・足の指付

写真３－10　上　　腕(1)

写真３－11　上　　腕(2)

写真３－12　脚(1)

写真３－13　脚(2)

写真３－14　芯　　付

写真３－15　胴　　組(1)

写真３－16　胴組(2)（乳房・臍）

写真３－17　男根製作(1)

写真３－18　男根製作(2)

写真3－19 頭 部 製 作

写真3－20 頭 部 取 付

写真3－21 男 根 取 付

写真3－22 面 書 き

写真3－23 面 付

写真3－24 台 車 付

写真３－25　槍・刀・装備

写真３－26　頭髪（エビクサ）取付

鹿嶋舟の製作工程

写真４－１　骨組（槻木・杉・杉葉）

写真４－２　舟　座　取　付

写真４－３　舟　側　取　付

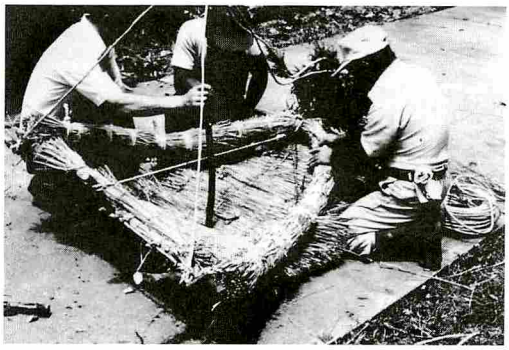


写真４－４　帆　柱　取　付

鹿嶋巡行・鹿嶋流し

写真５－１　鹿嶋巡行(1)

写真５－２　鹿嶋巡行(2)

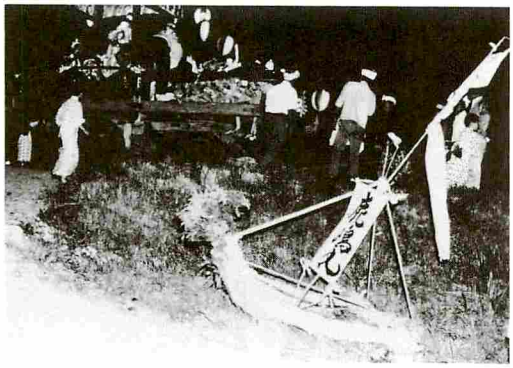


写真５－３　鹿嶋巡行(3)

写真５－４　鹿嶋流し(1)

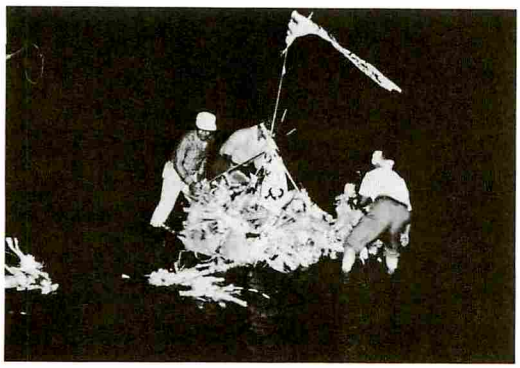
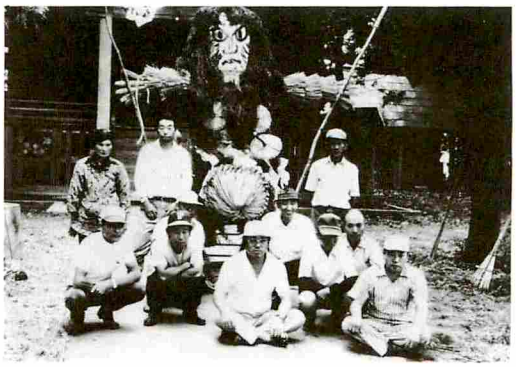


写真５－５　鹿嶋流し(2)



昭和57年度　鹿嶋行事八幡講年番